



やまぼうし



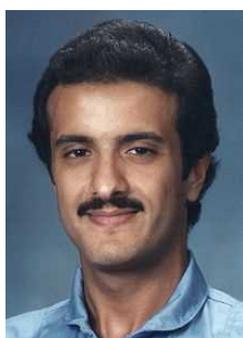
神石高原中学校 学校だより No. 11

平成 29年3月1日

“Only One Earth”

“The first day or so we all pointed to our countries. The third or fourth day we were pointing to our continents. By the fifth day, we were aware of only one Earth.”

— Sultan bin Salman Al-Saud



最初の一日か二日は、みんな自分の国を指さしていた。三日目・四日目は、それぞれ自分の大陸を指さした。五日目になると私たちの頭の中には、たった一つの地球しかなかった。

※スルタン・ビン・サルマン・ビン・アブドゥルアズィーズ・アル・サウード（1956年6月27日生まれ）サウジアラビア空軍のパイロットで、スペースシャトルに乗り込んだ7人のうちの1人。アラブ人、イスラム教徒として、また最年少（28歳）で初めて宇宙飛行を経験した人物。

3年生はもうすぐ義務教育を終えます。今回とりあげた名言は、「地球から離れていくに従って、たった一つのかげがえのない地球が見えてくる。どうして国同士で争ったり、自分の利益を求めると他の人々を苦しめるのか、アル・サウードはそういう世界にいた一人として、大切なことに気づいた。」その時の感動を言葉にしたものです。これまでの学校生活を振り返り、泣いたり喜んだり怒ったり、いろいろな経験が頭の中をめぐっているとします。今考えると、どっぷりとその中に浸かっていて気持ちの整理がつかなかった。でも今は落ち着いて冷静に考えることができる。その感動をアル・サウードと共感できればと思うのです。それが成長であり、義務教育を終えるということなのかなと思います。それに、かけがえのないもの（ほかに代わるものがない大切なもの）は、自分にとって一体何か、いつも冷静に見て考えられる人になれたらなあと思います。

セクハラ・体罰・いじめ相談窓口 教頭・養護教諭・担任まで 神石高原中学校 89-0003

沖縄この冬一番の寒い三日間でした。 2年生は沖縄修学旅行に行ってきました。飛行機に乗るのが初めて



の生徒も多く、広島空港を離陸するときは、高度が上がるしばらくの間は「おー！」という歓声なのか悲鳴なのかわからないどよめきが続きました。どこの観光地も逆に人が少なく自分たちだけで写真を撮ることができました。左は首里城「守礼の門」ですが、ここでも他に人がおらず珍しく独占状態でした。寒かった分何とか盛り上げようとガイドを担当してくださった崎原さんの頑張りようはすごかったと思います。沖縄の過酷なまでの戦争体験・嘉手納基地・広がるサトウキビ畑・公設市場の沖縄ならではの産物、沖縄の様々な顔を垣間見た三日間でした。この三日間は日

本全体が寒波に覆われていたため、吹雪の中の学校帰着となりました。旅行中はインフルエンザにかかることもなく全員無事帰ってホッとしました。一つ残念なのは、解散式ができなく保護者の皆様には大変申し訳なく思いました。

行事計画3月

日	曜	行 事	日	曜	行 事
1	水	PTAあいさつ運動 油木高校卒業式	16	木	
2	木	3年生を送る会	17	金	卒業体験をきく会
3	金	高原寮観望会	18	土	吹奏楽合同練習会
4	土	吹奏楽合同練習会	19	日	
5	日		20	月	<春分の日>
6	月		21	火	
7	火	高等学校選抜(II)	22	水	
8	水	高等学校選抜(II)	23	木	小学校卒業式
9	木		24	金	修了式・離任式
10	金	第3回卒業証書授与式	25	土	吹奏楽合同定期演奏会(14:00さんわ総合センター)
11	土		26	日	
12	日	JINSEKI雪どけマラソン	27	月	
13	月	集金日	28	火	
14	火	選抜(II)発表(3年生の一部午後登校)	29	水	
15	水		30	木	
					31 金

話のテーマ「残したいもの」

先日高速バスに乗って広島へ向かいました。私の席の周りはお年寄りの女性が何人か座られ、周りのことを気にするでもなく、大きな声で話をされていました。私は眠気に任せてうつらうつらしていましたが、こんな会話が耳に飛び込んできました。「まいたんびゅう、そがぁなことをいわれりゃどうなろうに」「ひてえでもはよう退院できりゃええのにお」・・備後弁の会話の内容が自分にはわかる。私はちょっと楽しくなり、小さな声で繰り返しながら、そっと手帳を取り出し忘れないようにメモしました。おそらく知り合いの誰かが入院し、医師からいろいろと注意を受けている。それに対して一日でも早く退院したらいいのにと返しているのでしょう。

あと10年か20年もすると、こんな会話はすたれていくのかなあと、なんとなくさみしく感じました。「てごをせえ」とか「やげろうしい」とか今の生徒たちには、わけのわからない声かけを受けて育った自分が、遠い昔の別人のように思えます。あの頃は下の写真のように、田や畑にたくさんの人の姿がありました。休み前の学校では地区別のグループ会があり、「よそのなりそをとらない。」とか「あべんこの場所は〇〇で」とか話し合っ



ていました。

神石高原町では過疎化、耕作放棄地の増加など多くの問題を抱えていますが、気がつかないうちに消えていく方言、これも大きな問題なのかもしれません。

石川啄木という人の句に「ふるさとのなまりなつかし停車場の、人ごみの中にそを聴きにゆく」というのがあります。彼は岩手県出身で、当時東京で暮らしていました。故郷がなつかしい、上野駅に行けば人ごみの中でひょっとしたら

自分のふるさとの言葉が聞けるかもしれない。そんな思いで作った詩です。バスの中で聴いたおばあちゃんたちの会話も、自分にとっては同じことだったのだと思います。

神石高原中学校から巣立っていく生徒の皆さん、生まれ故郷を大切に、生まれ故郷を誇りに・・・・・。